

2022年度

群馬県立女子大学

文学部英米文化学科後期日程試験

入学試験問題

小論文

注意事項

- 1 指示があるまで、この冊子を開いてはいけません。
- 2 この冊子を開くと、問題が両ページに印刷されています。印刷に不鮮明な点があれば、手を挙げて監督者に申し出て下さい。
- 3 解答は、解答用紙の所定の欄に記入下さい。

次の文章を読んで、あなたはどのように考えますか。あなたの考えを600字程度で書きなさい。

異文化に入ったとき、まずはじめにおぼえるのは挨拶のことばであろう。それでいて、日常生活の中で挨拶のやりとりを、時、場所、相手との関係で適切にするのはなかなかむずかしい。それがよどみなく上手にできるようになれば、その文化が十分身についたのだといってもいいだろう。挨拶はいわば、文化の入口にあり、同時にその文化の奥深い「こころ」につながっている。

ところで、私が長年つきあってきた西アフリカのモシ社会には、「こんにちは」「さようなら」「ありがとう」に当ることばがない。この語は、私たちの感覚からすれば最も基本的な挨拶のことばで、知らない社会に入ったとき、少なくともこの三つはおぼえないと、人とのつきあいがうまくいかない。モシ社会でもその通りなのだが、つまり彼らの社会には、こんな簡便な定型句がないというだけの話なのだ。「こんにちは」は、人と人が出会ったときの最も簡略化された挨拶だが、モシ社会では、どのような人がいつ、どのような状況で出会ったかによって、いろいろ異なる挨拶をしなければならない。「さようなら」についても同じことがいえる。

「ありがとう」は、アラビア語からとり入れた「バルカ」という元来「神の恩寵」を意味した語が、日常軽便にはよく用いられる。しかしイスラーム文化の影響とともに入ってきた外来語であり、日本語なら「サンキュー」などというのに当るだろう。これにモシ語の「たくさん」を意味する「ウスゴ」とか、「拝する」という語から出た丁寧語「プース」ということばをつけて「バルカ・ウスゴ」（どうもありがとう）とか、「プース・バルカ」（ありがとうございます）などということも多い。だが、しかるべき人がある程度きちんと礼を述べるときには、こんな簡便なことばは避けて、そのときどきの状況に応じて、何がどのようにありがたいのかをことばをつくって述べるのが正しい。これは日本語でもいえることで、ただ生活が忙しくなり、虚礼廃止の風潮がつよまったために、「すみません」とか「どうも」ということばの濫用とともに、簡便挨拶も広まったのであろう。

さらに簡略化されて、アメリカ人の親しい間柄でのように、すれちがいざま「ハイ」といって軽く手をあげるだけですむといった能率主義は、モシ社会には通用しない。他の多くのアフリカ社会と同様、挨拶はことばの長くつづくキャッチボールであり、一往復で済んでしまっては物足りないのである。私たちの社会でもついこの間までは、道端で出会った婦人二人が、あるいは座敷に通された客と主人が、交互に頭をあげさげして長々と挨拶のことばを述べあっていたものだ。

数年前、ブラジル北西部の奥地に、絶滅寸前の狩猟採集民ナンビクワラの小集団

を訪ねたとき私が感銘を受けたのは、彼らの間に挨拶のことばがないということだった。彼らのごく僅かの物質的装置で、数十人でいつも一緒に暮している。こうした集団内では、人と出会ったり別れたりするときの挨拶もいらないし、人に何かしてもらって嬉しければ笑う、気に入らなければ怒る、といった喜怒哀楽の直接の表現だけで十分なのであろう。その上にまた何をわざわざことばにして、感謝や悲しみをいい表わす必要があるだろう。これはモシ社会のように、王さまがいたりして社会関係がややこしく、感情の屈折した社会で簡単な挨拶句がないのとは、対極的な状況であるように思えた。

川田順造『コトバ・言葉・ことば—文字と日本語を考える』（青土社 2004年）